

CH-4-Ⅲ-02S	<b>医薬品科学Ⅱ</b>	第4学年	後期 必修	1単位
<b>担当者</b>	津吹 政可			
<b>一般目標 (GIO)</b>	薬物と生体の相互作用を有機化学の視点を通して理解を深めるために、医薬品の作用機序および開発経過等に関する基本的な知識を修得する。			
<b>到達目標 (SBOs)</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 有機化学を通じて医薬品を理解できる。</li> <li>2. 医薬品開発の概要を説明できる。</li> <li>3. 生体標的分子と医薬品の相互作用を説明できる。</li> <li>4. 交感神経作動薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>5. 抗炎症薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>6. 抗潰瘍薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>7. 高血圧治療薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>8. 高脂血症治療薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>9. 糖尿病薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>10. 感染症治療薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>11. 抗がん剤の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>12. 免疫系治療薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> <li>13. 中枢系治療薬の来歴・薬効及び開発状況を説明できる。</li> </ol>			
<b>受講心得・準備学習等</b>	医薬品の薬理活性を理解するうえで、化学構造を基盤に考えることは非常に重要であり、生体内での薬物の代謝や標的部位での相互作用は、まさに有機化学そのものである。基本となる有機化学をもう一度勉強する姿勢を大切にしたい。忘れていたり、勘違いしていた基礎事項に関しては復習することを薦める。受講前に該当する箇所を事前に読んでおくこと。			
<b>事後学習・復習等</b>	創薬に関する広範な事項を概説するので、復習の際に下記に掲載した参考書（図書館蔵書）を利用することを薦める。講義での説明を含めて、毎回自らまとめておくこと。			
<b>オフィスアワー</b>	講義実施日の16:00～19:00。メールによる質問等は随時受け付ける。			

### 授業の形式と各回の内容

授業の形式		講義形式で行う
回	項目	内容
1	医薬品開発の概要	医薬品開発のしくみ
2	医薬品開発の概要	標的分子と医薬品の構造
3	交感神経作動薬	来歴・薬効及び開発状況
4	抗炎症薬	来歴・薬効及び開発状況
5	抗潰瘍薬	来歴・薬効及び開発状況
6	高血圧治療薬	来歴・薬効及び開発状況
7	高脂血症治療薬	来歴・薬効及び開発状況
8	糖尿病治療薬	来歴・薬効及び開発状況
9	感染症治療薬	来歴・薬効及び開発状況
10	抗がん剤	来歴・薬効及び開発状況
11	免疫系治療薬	来歴・薬効及び開発状況
12	中枢系治療薬	来歴・薬効及び開発状況

<b>成績評価の方法</b>	定期試験の成績で評価する。
<b>成績評価の基準</b>	試験結果の合計点が60パーセント以上を合格とする。講義中の質疑応答により理解度を確認するが、成績には加味しない。
<b>教科書</b>	赤路等「ベーシック創薬化学」（化学同人）
<b>参考書など</b>	有機合成化学協会「トップドラッグから学ぶ創薬化学」（東京化学同人） 周東 智「有機医薬分子論」（京都廣川） 水島 裕「今日の治療薬2017」（南江堂） 長野哲雄等「創薬化学」（東京化学同人） 野崎正勝等「創薬化学」（化学同人） J. マクマリー「生化学反応機構」（東京化学同人） J. マクマリー「有機化学-生体へのアプローチ」（東京化学同人） 有機合成化学協会編「医薬品の合成戦略」（化学同人） 橋高敦史等「創薬科学・医薬化学」（化学同人） 服部成介「絵ときシグナル伝達入門改訂版」（羊土社） 佐藤健太郎「創薬科学入門」（オーム社） いずれの参考書も本学図書館で閲覧できる。

